記念特別展

戦国城下町一乗谷を歩く

～発掘調査と環境整備のあゆみ～

平成23年7月16日(土)から9月11日(日)までの間、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館では、「一乗谷朝倉氏遺跡特別史跡指定40周年・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館開館30周年・一乗谷朝倉氏庭園特別名勝指定20周年記念特別展」を開催しています。

戦国時代の城下町がそっくり残る「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡」。40年以上続く発掘調査により往時の生活の痕跡が次々に明らかとなり、一乗谷が大きな都市であったことを肌で感じることができます。

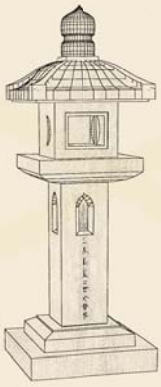
今年は、一乗谷の記念すべき年。福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館では、通常展示されていない重要文化財や朝倉氏ゆかりの遺宝などを特別に公開します。

ご来館をお待ちしています！

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
主任　川越 光洋氏

注目すべき展示品をご紹介します。

その一　高さ約2.5メートルの笏谷石製の石灯籠（1571年造立）



忠実に復元できるほど相当部分を発掘調査で発見しました。これほど大きい出土品は全国的にも大変珍しく、当時城下町を往来した人々にとって、町の象徴的な存在の一つだったことでしょう。

その二　立体的「鳥瞰図映像」

今回の記念特別展に合わせ、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の全景を上空から見下ろした立体的な映像を制作しました。複数の航空写真をデジタルデータでつなぐなど特殊な方法で作りこんだものです。鳥になった気分でご覧下さい。遺跡のポイントが一目でわかります。

その三　伝愛王丸所持「一節切（ひとよぎり）」

天正元（1573）年8月、当主朝倉義景自刃の後、母光徳院と夫人小少将、息子愛王丸（4歳）は、朝倉景鏡（義景の従兄）に捕えられ、京への護送の途中、信長の命を受けた丹羽長秀によって殺害されます。このたて笛は、その際に愛王丸が所持していたと言われるもので、中世の尺八のひとつ「一節切」です。完全な形を保つものとしては日本最古とみられており、今回は、期間限定で特別公開します。

また、遺跡から出土し保存修理された一節切（重要文化財）を公開するほか、通常は展示していない貴重な資料もご覧いただけます。

このほか、関連行事として、一乗谷の初期の発掘調査を担当された小野正敏氏（国立歴史民俗博物館元副館長）等をお迎えした記念シンポジウム（7月31日（日）、先着100名・要申込）を開催します。

さらに、遺跡見学会（8月7日（日）、先着40名・要申込）や、展示説明会（7月17日（日）・9月4日（日））も実施します。ぜひ、この機会に当資料館にお越しいただき、フィールドミュージアム（野外博物館）としての一乗谷の魅力を改めて発見してみてください。

戦国城下町一乗谷

1337年、越前守護斯波高経に従い、越前に入国した朝倉氏。
朝倉広景は現在の福井市黒丸町にあった黒丸城を本拠地とし、北庄に勢力を広めました。
その後、本拠地を一乗谷に移しますが、時期については諸説あります。
朝倉氏の歴史を記した軍記『朝倉始末記』によれば、1471年、一乗谷に築城したとされますが、近年紹介された『朝倉家伝記』や『朝倉家記』などの新出史料によると、1404年に没した朝倉氏景は、一乗谷に熊野を勧請して社殿を建てたとされており、すでにそのころから一乗谷を本拠地にしていたものとみられます。
一乗谷は、

- 敵を牽制し天然の要害なる東西の山麓がある
- 美濃・飛騨・尾張に通ずる美濃街道に面し、京への北陸道にも近い
- 水量豊かな足羽川が流れている

ことから、この地を防御と水運を兼ね備えた「天下一の地」と見立て、城を移転、築城することを決めたと考えられます。

イラスト：香川元太郎　監修：青木豊昭「学研 図説・戦国合戦集」より